
異世界回帰ナイトメア

ウスバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界回帰ナイトメア

【Nコード】

N6970Y

【作者名】

ウスバー

【あらすじ】

深夜0時、気付くと俺はファンタジーゲームのような世界に立っていた。

夜毎に異世界に飛ばされる俺は、今夜もこの悪夢の世界で、消えた幼なじみを探す。

お読みになる前に

この作品は、現在なろうに投稿中の別作品『天啓的異世界転生譚』に足りない要素（シリ阿斯・バトル・謎解き・成長・一人称）満載の話を書いて、気分転換しようとして作り始めた物です。

それなりにまとまった量が出来たので試しに投稿をさせて頂きますが、別作品については頑張りすぎて燃え尽きた感があるので、こちらは頑張りません。のんびりひっそりと進めていくつもりです。

以下、頑張らないポイント。

- ・更新速度を頑張りません。

最初にスタートダッシュでいくらか投稿した後、週一か隔週くらいで更新して、ロングラン投稿を目指したいと思っています。

- ・感想を頑張りません。

当面の所は感想・レビュー欄は閉じておきます。
誤字脱字や設定のミスについては必ず出て来るでしょうが、あまり気にしないことに決めました。見つけても笑ってスルーしてやってください。

- ・ジャンルも頑張りません。

この作品は神様転生でも勇者召喚でもVRMMOトリップでもありませんが、大体それに準ずる物です。

また、この作品の主人公はチートでも最強でもありませんが、大体それに準ずる物です。

- ・情景描写まで頑張りません。

風景・景色の描写、文化・生活の描写、ついでに人物の容姿・服

装等の外見描写、全て苦手ですのであまり頑張りません。

異世界旅行記的な面白さはおそらくありませんのでご注意下さい。

・告知もやつぱり頑張りません。

不定期に気の向くままに更新。次の更新予定なんて本人もたぶん知りません。

また、予告なくちよくちよくと文章や設定等をいじり、特にパラメータ関連は知らない内に細かい修正が入ったりするかもしれません。

さすがに全面改稿等、大規模な修正をする時は最新話のあとがきで告知するつもりですが、たぶんそんな頑張りが必要なことはそもそもやりません。

・シリアス・バトル・謎解きはちよつとだけ頑張ります。

シリアスもバトルも書くのは苦手だったりしますが、ほんの少しだけ頑張ってみます。

ファンタジーに謎解き要素がある必要性は皆無だと思いますが、こちらはかなり頑張ってみるつもりです。

こんなに頑張らない作品でも読んでやるよという寛大な方は、是非『次の話』をクリックしてみてください。

初っ端から意味不明なプロローグが始まるはずです。

では、楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ

——たぶん、十日ほど前のことだったと思う。

月明かりの下で、俺はいつものように縁ゆかりと話をしていた。

『世界は暗闇に包まれ、既存の秩序や法則は全て崩壊し、確かな物は何一つありません。』

この世界で貴方が初めて見つけた物は何ですか？』

『それ、何の心理テストだ？』

突飛なことばかり言う奴だったが、今日のそれは一際荒唐無稽だった。

『んー。悪夢の世界を生き抜けるかどうかのテスト、かもね』

『意味が分からねえよ』

なんて突っぱねても、俺が縁の言葉を無視できるはずもなく、数秒ほど置いて、俺は結局答えていた。

『光、かな？』

『ひかり？』

意外そうな顔をされたけど、それほど意外な答えでもないはずだ。

『だって、真っ暗なんだろう？ だったら懐中電灯でも、ペンライトでも何でもいい。』

とにかく明かりがないと、困るじゃないか』

『どうして？』

真顔で聞いてくる。

『どうして、って……』

それが当たり前だからと、俺はそう答えたかった。
しかし、縁の表情がそれを許さない。
なぜなら実際に、俺が考えていたのはもっと別の理由なのだ。

『どうして明かりがないと、困るの？』

それを読み取ったみたいに、窓から身を乗り出して、幼なじみの顔が近付いてくる。

俺は、これに弱い。

急に心臓が狂ったみたいに高鳴って顔面に熱が集中して、何を考
えていいのか分からなくなる。

そして、それが分かっててこいつはこんなことをしてくるのだ。

『だって、明かりがないと……』

だから俺は、為す術もなく重い口を開く。

耳の後ろを流れる血潮の音が耳障りで、月明かりで火照った顔を
見られないように、微妙に顔を逸らしながら……。

それでも、俺は言ったんだ。

赤面物の台詞を、真顔で。

『お前を、探しに行けない』

それを聞いて、不意打ちを受けたみたいに目をまるくして、それ
からその顔が泣きそうな形にくしゃつとゆがんで、まるで泣き笑い
のような顔で、縁は――

「いじめんね、光」。ちよなひ……」

「お兄ちゃん！」

静寂を揺らす無粋な声に、俺はゆっくりと目を開ける。
途端に俺の網膜に、刺すような人工的な明かりと、年下らしき少女の顔が映る。

——こいつ、誰、だっけ？

まだ、頭が働かない。

——というか、ここ、どこだっけ？

まだ、意識が夢の中からもどらない。
当たり前に分かるべきことが、何も理解できない。
世界の空気に体がなじまず、体の機関が全て空転している。

「なんでお兄ちゃんはこのなとこで呑気に寝てるの?!」

そんなこと俺にだって分からない。
とにかく体が重い。
眠らせて欲しい。

「縁お姉ちゃんがお兄ちゃんだけどっかに連れてっちゃったから、
なにかあるのかなって思って、結芽^{ゆめ}もついてきたのに!」

——縁、お姉ちゃん？ それに、お兄ちゃん？
脳が軋みを上げる。

——結芽、か。ええと、こいつは俺の妹、だっただっけ？

「もーいいよ！ わたしはまた寝ちゃうから!」

ベッドの正面にある扉を開けて、

「もう全部知らないから！ 絶対起こさないでね！」

奥の部屋に行ってしまったおうとする結芽。

——あれ？ こいつ行っちゃう、のか？

なんとなく、奥に見えたベッドだけの部屋が寂しげで、

「結芽！」

俺は意味もなく、結芽を引き留めていた。

「なに？」

結芽が俺を、驚くほど感情のこもらない目で見る。

「あー、その……」

思えば、たぶんここで俺は少しだけ、夢から醒めた。

夢から醒めて、なのになまた寝ぼけたことを言った。

「いい夢、見ろよ」

これはないだろう。年下とはいえ思春期の少女に、そんな子供だましにもならないような言葉が意味をなすはずがない。

案の定、結芽は一瞬だけきょとんとしたが、すぐに悪戯っぽい笑みでこちらを見返してきた。

「へー。お兄ちゃんは、わたしにどんな夢を見てほしいのかな？」

申し訳ないが、そんなに期待するような目で見ないで欲しい。
こっちの脳みそは既に限界だ。

眠りたい。とにかく眠りたい。出来れば楽しく眠りたい。

「俺と結芽が楽しく暮らす夢、とか？」

そんな連想から生まれたその苦し紛れの言葉は、意外にも結芽に
まで届いたようで、

「ふうん。……それはとても、いい夢だね」

温かい言葉を返してくれた、と思う。

なのにその時結芽が浮かべた寂しげな表情。

それは、少女に似つかわしくない、とてもとても、大人びた顔で、

「おやすみ……お兄ちゃん」

それでも結局扉は閉まる。

結芽の姿は、その奥に消えていく。

「おやすみ……結芽」

それを見届けて、俺も目を閉じた。

——それが、俺にとって全ての終わり、全ての始まりだった日の記憶。

この日こそが俺の、平和で平凡で平穏だった日常が、退屈だけだと愛すべき世界が終わった日。

そして、俺の前から縁が消えた日だったのだと思い出すのは、だいぶ後になってからの事だった。

1・ハロー、トラベラー

——たぶん、『あの日』から一ヶ月と少し前。

『ゲーム？ 夢の中で？』

俺は、縁の突拍子のない話に、つい驚きの声を上げてしまった。

『あんまりびつくりしないでね、って言ったのに』

縁は少しだけ唇をとがらせた。

そんな仕種も愛らしい、ではなくて、

『だけど、そんなこと出来るのか？』

『分からないよ。分からないから、聞いてるんだし』

こっちとしてはもつと訳が分からない。

『そもそもお前って、夢で見るほどゲーム好きだったけ？』

俺も縁も、ゲームはあまりやらない方だったはずだ。

かろうじて俺は最新のゲーム機くらいは持っていたりもするが、縁の家にそんな物があったかどうかは……正直記憶にない。

『やらないよ。特にRPGとかそういうのあんまりやったことないから、最初は苦労した』

まだ少しだけふくれっ面のまま、縁がぶっきらぼうに言う。

『苦労、って？』

『キャラクタービルド、とか、パーティの構成、とか？』

『はあ？』

縁の口からあまりに似合わない言葉が出て来て、俺はつい間抜け顔を晒してしまった。

『そんな顔しないでよ。なんとなく集団のリーダーみたいなのを任されちゃったから色々大変だったの!』

顔を真っ赤にして怒る縁もやっぱり愛らしい、ではなくて、

『あ、悪い。でも、なんか本格的だなんて思ってたさ』

ちよつと失礼な態度を取りすぎたか、と俺は慌ててフォローを入れた。

それを聞いても縁はまだ不機嫌そうな顔をしていたが、俺が頑張って視線を外さずにいると、やがて表情を緩めた。

『んー、もういい。』

光一にゲームのこと、色々聞いてみようと思ったけど、考えてみれば光一だってそんなにゲーム詳しい訳じゃないもんね。ネットと使って自分で調べる。

あーあ、説明書さえあればなあ……』

そして、ようやく機嫌を直した縁に対して、

『さすがに夢にマニュアルはないだろ』

と無神経な一言を言ってまた縁をふくれっ面に戻すことになるのだが、それもまた、遠い日の記憶で……。

「……ただいま」

俺はあいさつというより、独り言みたいにそう言い捨てながら、玄関の扉を開けて、

「おかえり」

すぐにその返答が返ってきたことに驚いて、玄関の前でしばし、硬直した。

「おかえり、お兄ちゃん」

それが不満だったのか、自分の存在を主張するみたいに、もう一度声かけられる。

それで、ようやく俺の硬直は解けた。

「な、何だ、結芽^{ゆめ}か」

息をつくようにそう言つて、俺は靴を脱いだ。

声の正体が義妹だと分かって俺は少しだけ緊張を解くが、それでも心臓はなかなか平常運転に戻ってくれない。

靴を脱ぐためその場にかがんでいる間にも、妹の視線を感じる。上からのプレッシャーがすごい。

靴を脱ぎながら、ちらりと前をうかがう。

妹の真っ白な素足と、その少し上辺りまで垂れた、水色のエプロンの端が見えた。

これの色違い、俺も持つてるんだよな、なんて考えながら、出来るだけ時間をかけて靴を脱ぐ。

それでもそんな時間稼ぎには限界がある。

とうとう靴を脱ぎ終えてしまった俺は、顔を上げながら妹に何でもないように声をかけて、

「どうしたんだよ、こんな所で。何か用事でも……」

「お兄ちゃんを、待つてた」

最後まで言わせてももらえなかった。

妹は、その黒目がちの大きな瞳にどこか思い詰めた色をたたえて俺を見ている。

……正直、何か色々ぞくぞく来た。

「お兄ちゃん。最近結芽のこと、避けてるよね」

疑問ではなく断定。

想像して然るべきだった指摘に、それでも律儀に動揺する心を鎮めるのに数瞬。

けれどすぐに持ち直して、俺は必死に取り繕って口を開いて、

「まさか。そんなことな——」

「それって、好きな人ができたから？」

またも、言葉の出足を潰される。

しかしそれも当然か。

俺と結芽では言葉に入れている力が違う。

こいつの言葉はいつも直球勝負だ。

あらゆる意味で遊びがない。

だから妹は攻め手を緩めない。

「天壤先輩は、お兄ちゃんのことなんてたぶん気にもしてないよ？」
痛烈な言葉を、たぶん、俺に痛烈に響くだろうと考えている言葉を、容赦なく吐いてくる。

……だが残念。

そんな言葉に意味はない。

そんなことはとづくに知っている。

そもそも、俺が『惚れているという設定の』天壤先輩とは廊下ですれ違ったことすらない。なのに気にされていたとしたら、その方がずつとホラーだ。

俺の無言をどう解釈したのか、妹は少しかだけ語気を緩めて俺に歩み寄ってくる。

「ねえ。お兄ちゃん。前みたいにはできないのかな？」

好きな人ができたら、妹とは一緒に話すこともできないの？」

「……………」

俺は、何も答えられなかった。

そもそも、順番が違う。

好きな人が出来たから前のように話せないんじゃないじゃなくて、前のように話せないから、好きな人が出来たなんて嘘を吐いたんだ、なんて事情、当人に話せるはずもなく、

「悪い。疲れてるから」

その一言だけで話を打ち切ると、

「お兄ちゃん！」

無言の背中で妹の声を跳ね返しながら、俺は自分の部屋に向かう。

それでも、妹の声は俺を追いかけてくる。

「待つて！ お兄ちゃん、ご飯は？」

「…要らない。向こうで食べてきた」
嘘だった。

けれど、要らないのは本当だ。

まるで食欲がわかない。

もういつそのまま寝てしまおうと考えながら、俺は部屋に入る。

ドアが閉まる瞬間、

「こんなのぜんぜん楽しくないよ、お兄ちゃん……」

聞こえてきた妹の言葉が、やけに胸に突き刺さった。

「ふう……」

俺は後ろ手に部屋のドアを閉め、手早く制服から着替えるとベッ
ドに倒れ込んだ。

——俺たちが倦怠期の夫婦みたいな会話を交わす羽目になったの
には、一応理由がある。

結芽は俺の本当の妹ではない。

一年ほど前のある日、家主の諒子^{りょうこ}さんが、

「今日から家族が増えることになったよ」

と言っていていきなり連れて来たのが、彼女、遠野結芽^{とおの ゆめ}だった。

突然新しく出来た家族に当然俺は戸惑ったが、幸いにも結芽と俺の相性は悪くなかった。

俺たちは少しずつ少しずつ、お互いのことを理解していった、それにつれてゆつくりと、ちよつとずつ仲良くなっていって、段々と仲良くなっていって、さらに仲良くなっていって、もっと仲良くなっていって、もっともつと仲良くなっていって………結果、仲良くなりすぎた。

普通の兄妹なんて物を知らなかった俺たちは、お互いに愛情を注ぐことにはばかり夢中になって、いつの間にか兄妹という関係性を飛び越えてしまっていた。

……いつからだっただろうか。

妹の俺を見る目が、妙に熱く潤んでいることに気付いたのは。

……いつからだっただろうか。

妹の俺への態度に、単なる兄妹愛以上の何かを見出したのは。

いくら義理とはいえ兄妹で色恋沙汰なんて冗談にもならない。

何より、俺たちをこうして養ってくれている諒子さんに申し訳が立たない。

——そうして俺は、結芽の熱が冷めるまで、妹と距離を取ることが決めた。

そうは思っけていても、無邪氣に懷いてくる結芽を邪険に扱うのはどうにも心苦しい。

おまけに付け焼刃の兄の悲しさか、そういうことを意識してからこちら、どうしても結芽を『妹』ではなく『かわいい年下の女の子』として見てしまう自分にも氣付いていた。

だからせめて、好きな人が出来たと言つて距離を置こうとしたのだが、

「それを理由に詰め寄つて来られちゃ、逆効果だよなあ……」

あの妹が、そんな嘘でどうにかなるような相手であるはずがなかった。

「あー、もういいや！ 寝よ寝よ！」

本当に眠る氣なんてなかったはずだったが、これ以上起きていても氣が滅入るだけだ。

蛍光灯の光を、腕をかざしてさえぎる。

そのまま全てを忘れるように目をつぶつて、頭の中を空っぽにする。

幸い遅くまで遊び歩いていたせいか、自分の想像よりも体は疲れて眠りを欲していた。

意識は瞬く間に、夢の世界へと旅立つて……。

(……あれ?)

気が付いた時、辺りは真っ暗になっていた。

(俺、いつ電気消したっけ?)

そんな呑気なことを考えたのも束の間、すぐに異常に気付く。

(なんだ、これ……!)

明かりどころの話じゃない。

俺は今、自分の疑問を声に出して言っただつてもりだつた。
なのに、声が出ない。

いや、声の出し方が分からない。

(なんなんだ? なんなんだよ、これは……!)

それどころか、体の感覚が一切ない。

手を動かそうにも、手の動かし方が思い出せない
足を動かそうにも、足がどこにあるのかすら分からない。

目や耳も鼻も利かない。

世界を知覚する全ての情報が遮断されていた。

何が何だか分からない。

あまりに状況が理解出来ず、パニックを起こしかける。

——だがそんな時、闇に『声』が響いた。

「ハロー、トラベラー。」

ナイトメアの世界にようこそ。

貴方は7013027492人目の探訪者です」
トラベラー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6970y/>

異世界回帰ナイトメア

2011年11月21日13時43分発行